ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり
～　一人一人の「わかる」喜びと学ぶ力を教職員の協働で育む　～

高度学校教育実践専攻　　実習責任教員　西　村　　公　孝
教職実践力高度化コース　　実習指導教員　金　児　　正　史
山　本　　千　明

１．研究課題の設定と研究構想

平成 24 年、中央教育審議会初等中等教育分科会により「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」についての報告が出された。共生社会の形成に向け「障害のある子どもと障害のない子どもができるだけ同じ場で共に学ぶこと」を目指し、一人一人の教育的ニーズに応じた多様で柔軟な援助や指導の充実が求められている。

一方で、平成 24 年に文部科学省から出された「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」では、通常の学級において、知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合は推定値 6.5％という結果が明らかとなった。この調査では、学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒以外にも、困難があり、教育的支援を必要としている児童生徒がいる可能性も指摘されている。実習校の学校アセスメントの結果からも、基礎的・基本的な学習事項の定着不足や学びへの構えの課題とともに、様々な面で個別に配慮を要する児童の増加とその対応が課題として挙げられた。こうした個に応じた支援の対象の拡大に伴い、ユニバーサルデザインの考え方が重要視されるようになっている。教育におけるユニバーサルデザインの追求は、学び方の多様性に対応するための教育活動の在り方を再考することであり、インクルーシブ教育システム構築に向けた通常の学級における配慮や支援の一翼を担うものと考える。児童一人一人の学ぶ力を育むユニバーサルデザインの視点を生かした授業とはどのようなものだろうか。個々の教員のもつ実践知を参考にしながら、その在り方についての理解を深め、具体的方策を探ることをねらいとし、研究課題を設定した。課題検証のための手立ては、「学級づくり」「授業づくり」「組織づくり」の３つである。目指す児童像と手立てを図１に示す。

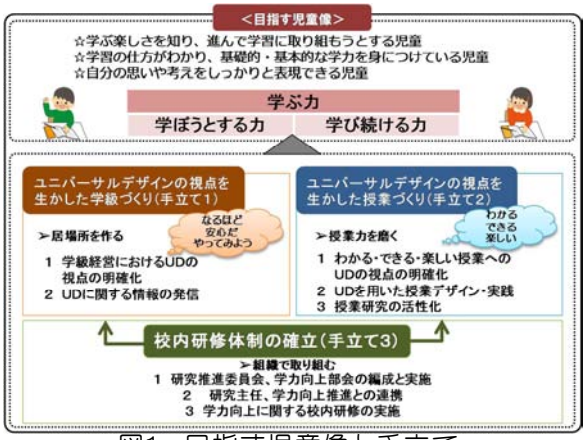

図1　目指す児童像と手立て

２．先行研究の分析と実践研究の関わり

(1) ユニバーサルデザインの視点

授業におけるユニバーサルデザインの２つのアプローチを挙げる。一つは CAST が提唱する「学びのユニバーサルデザイン」(以下、「UDL」と表記)である。UDL は「全ての生徒に最適な、ただ一つの方法などは存在しない。だからこそ、様々なオプションを提供することが不可欠であ

る」という基本理念をもつ。もう一つは、ある教え方が多くの児童の「わかる・できる」につながることを意味する指導を主体とする視点をもつ桂聖らによる授業のユニバーサルデザインである。両者の共通点を本実践研究の基本的な考え方としつつ、教育におけるユニバーサルデザインを「発達に課題のある児童には不可欠な支援であり、どの児童にとってもわかりやすい」と規定し、本実践研究における「ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり」を「配慮を要する児童には『なくてはならない支援』であると同時に、学級の他の児童にとっても『あると便利な支援』の工夫により、全ての児童が『わかる』喜びを実感し、学ぶ力を高めることができる授業づくり」と定義する。

(2) ﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝの視点からの「わかる」授業

認知心理学では、人間を一種の情報処理システムであると見なしている（図２）。

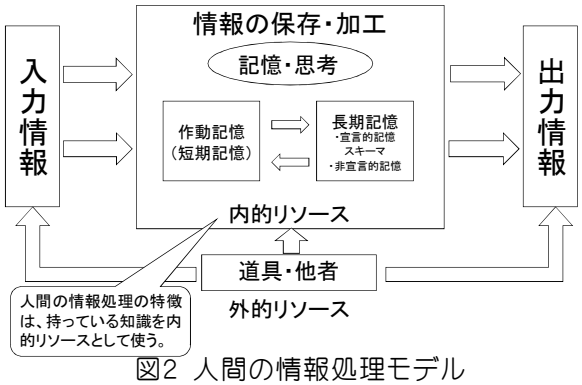

図2 人間の情報処理モデル

この情報処理モデルと UDL ガイドラインを照らし合わせ、指導の工夫や支援の例を検討した。情報の入力や出力では、多様な外的リソースの効果的な活用、学習者の認知特性を考慮した様々な感覚器官の活性化などが挙げられる。情報の保存・加工では、学習者の内的リソースである既有知識（スキーマ）の活用、新情報との関連付けのための手立て、学習者の作業記憶を考慮しつつ学習過程をモニタリングできる手続きなどが数多く用意されていた。

(3) 一人一人の学ぶ力の育成

学力について、広岡亮蔵の３層モデル、市川伸一の「学んだ力としての学力」と「学ぶ力としての学力」、改正学校基本法に規定された３要素、21 世紀型学力を概観し、本実践研究で育てたい児童の「学ぶ力」を、「学ぼうとする力」と「学び続ける力」と捉えた。それはすなわち、学習に向かっていく力、学ぶことに対する意欲や関心である。鹿毛雅治は、「自ら学ぶ意欲」のしくみを、「こだわり」が学ぶ意欲の源泉となり「学び」と「自分」を結び付けると考えている。ユニバーサルデザインの視点を生かして児童一人一人の「こだわり」の種に火を付けるには、個々の認知特性を考慮した外的リソースの活用、既知の活用、オーセンティックな授業づくり、支持的風土のある学級での協同的な学び、MI 理論の活用などが有効であると考えられる。

(4) 先行研究、先行実践からの示唆

ユニバーサルデザインの視点を具体化し、授業をデザインするため、筆者はユニバーサルデザイン７原則を基に、「教育におけるユニバーサルデザイン７原則」を作成、構造化し、桂聖らが提唱する「授業での『学び』の階層モデル」との関連を図った（図３）。本実践研究では「参加（活動する）」段階では、「安心感・学びやすい環境」づくりとしての「学級づくり」を重点にし、「理解（わかる）」段階では、誰もが学習に参加できるよう、「簡単」「わかりやすさ」「個に応じて」というキーワードからユニバーサルデザインの視点を生かした指導の工夫を図っていく。

図3「学び」の階層ﾓﾃﾞﾙとの関連図

３．学校課題フィールドワークⅠ

(1) ﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝの視点を生かした学級づくり

全校共通の学級づくりのためのユニバーサルデザインの視点として、「環境」「ルール」「時間」「人間関係」の４つを提案し、UD 通信などを通して実践の共有化を図り、学校全体で統一して取り組むための足がかりができた。

(2) ﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝの視点を生かした授業づくり

校内研究との連携を図り、授業づくりのためのユニバーサルデザインの４つの視点「簡単」「快適」「安心・安全」「柔軟」を提案し、授業研究における個々の実践やその省察の方向性が統一された。ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりは、特別教育の視点と教科教育の視点を合わせもつ質の高い授業を目指している。そこで、国語科の示唆を踏まえ、人間の情報処理モデルの働きも参考としながら、ユニバーサルデザインの視点を生かした指導の工夫として、以下の６つを基本的考え方とし、第３学年、第６学年で授業実践に取り組んだ。

①子どもとつなぐ化　②課題の焦点化 ③内容の見える化　④手段の多様化 ⑤学びの共有化　⑥指導のスモールステップ化

児童のアンケート結果や授業後協議などから、これらの指導の工夫により、配慮を要する児童だけでなく、全ての児童が国語の学習の楽しさを感じ、友達との関わりを深め、自己有能感を高め､学ぶ力が育まれたことが明らかとなった。

学級づくりの「人間関係」の視点と授業づくりの「柔軟」の視点で課題が残った。

(3) 校内研修の活性化

実習校の研究（研修主任）や学力向上推進計画（学力向上推進主任）と連携を図り、学力向上（UD）部会を編成し、児童の学力についての現状や全校で指導すべきことなどを確認した。

４．学校課題フィールドワークⅡ

(1) 学級づくりを支援する授業づくり

学校課題フィールドワークⅠで課題となったユニバーサルデザインの「人間関係」の視点を生かした学級づくりの手立てとして、学級づくりの「人間関係」の視点と授業づくりの「安心・安全」の視点の両方にアプローチできる外国語活動の授業を実践した。実践を通してコミュニケーションの質の向上が図られ、お互いのことをわかり合いたいという気持ちが高まり、安心感のある学級づくりや温かい人間関係の醸成へつなげることができた。また、児童のアンケート結果からは、温かい人間関係の中で、受容感を感じることは学ぶ力を高めることにつながることが明らかとなった｡これまで学級づくりを、授業づくりを支える基盤として捉えてきたが、本実践で授業づくりを通して学級づくりを行うという側面もあることが明らかとなり、相互の関連を以下の図のように捉え直した（図４）。

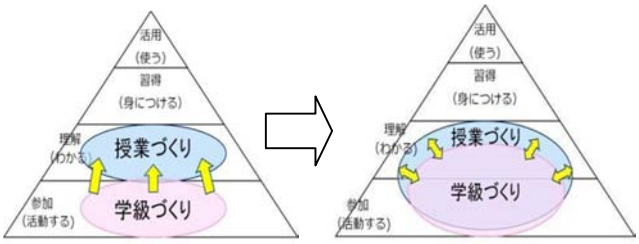

図4 学級づくりと授業づくりの関連

(2) 「柔軟」の視点に着目した授業づくり

児童一人一人の多様性に対応し、認知特性を考慮した授業づくりとして、MI 理論を基にした「学び方を学ぶ」授業を実践した。８つの知能を基に児童自らが自分の学びや力について振り返り、自己をメタ認知し、得意を生かした学び方を実践することで、学習への意欲付けが図られ、知識の定着につなげることができた。特に下位層の児童に大きく伸びが見られたことは、今後の指導に役立てることができるだろう。

(3) 教職員の実践の共有化

課題の共有化を図り、実践の方向性を再度確認するために、一学期に行った教職員と児童アンケートの結果をまとめ、その成果と課題について報告した。また、教職員の協力を得て一学期に引き続き UD 部会を月に一度開催した。

11 月末に行った教職員のアンケート結果からは、学年や学級間で差異はあるものの、ユニバーサルデザインの視点を生かした学級づくり、授業づくりともに取組は着実に前進していた。児童アンケートでは、幾つかの項目で指導の効果が発揮されていたが、全体として大きな変容は見られず、今後も引き続き指導の工夫を図る必要がある。授業づくりに関して肯定的意見が増加している学級は、いずれも学ぶ力に関する項目の肯定的意見が増加しており、この点からもユニバーサルデザインの視点を生かした学級づくり、授業づくりは児童の学ぶ力を高めていくことにつながっていると言えるだろう。

６．実践課題研究の振り返りと今後の展望

(1) 成果と課題

本実践研究全体を通して明らかになった成果を手立てに関連させ、次の５点にまとめた。

①「教育におけるユニバーサルデザイン」を「発達の課題のある児童には不可欠な支援であり、児童にとってもわかりやすい」と捉え、学級づくり、授業づくりのユニバーサルデザインの視点を明確にし、指導や支援の工夫を行うことで、児童は「わかる」喜びを感じ、学ぶ力を高めることができる。（手立て１，２）

②人間の情報処理過程とユニバーサルデザインの視点を関連づけた「子どもとつなぐ化」「課題の焦点化」「内容の見える化」「手段の多様化」「学びの共有化」「指導のスモールステップ化」の指導の工夫は、「わかる」喜びのある授業につながる。（手立て２）

③一人一人の学び方に着目し、児童自らが自分の得意を生かした学び方を自覚し実践することは、学習意欲を高め、知識の定着につなげることができる。（手立て２）

④安心感をもって学習に参加することができることに着目した授業づくりを行うことは、温かい人間関係を醸成し、支持的風土のある学級づくりを支援することができ、その温かい人間関係の中で受容感を感じることは、学ぶ力を高めることにつながる。（手立て１，２）

⑤学級づくりにおけるユニバーサルデザインの４つの視点「環境」「ルール」「時間」「人間関係」、授業づくりにおけるユニバーサルデザインの４つの視点「簡単」「快適」「柔軟」「安心・安全」を全校で統一し、通信や部会などを通して共通認識を図りながら学級づくりや授業づくりに取り組むことで、より指導の効果を挙げることができる。（手立て１，３）

次に、実践研究の課題を２点挙げる。

①半年間の実践では児童の意識の大きな変容は見られず、今後も指導の継続が必要である。

②教職員の取組や児童の意識の変容は、学年や学級により差異が見られ、学校全体で組織的に実践を継続できるよう、組織マネジメントの更なる充実を図る必要がある。

(2) 今後の取組課題

学び方は一人一人違う。「違い」に価値をおき、学びの多様性を生かしたよりよい教育活動を、児童を取り巻く多様な人々と共に実践していけるよう、自らも学び続けていきたい。

引用・参考文献

・市川伸一(2004)『学ぶ意欲とスキルを育てる』小学館

・桂聖(2011)『国語授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社

・CAST(2008) 学びの「ユニバーサルデザインガイドライン ver1.0」